

フィリピン台風ハイエンの調査報告をダボスで実施しました(2014/8/24-28)

テーマ：2013 年フィリピン台風ハイエン

場所：スイス・ダボス

8月24日～28日にかけて、スイスのダボスにおいて 5th International Disaster and Risk Conference IDRC Davos 2014 が開催され、江川新一教授(災害医学研究部門)、小野裕一教授(情報管理・社会連携部門)、加藤準治助教(地域・都市再生研究部門)、天野真志助教(人間・社会対応研究部門)が参加しました。8月26日には、東北大学災害科学国際研究所から“Lessons learned from the Typhoon Haiyan to propose a better strategy to cope with infrequent catastrophic events”として、2013年11月に発生したフィリピン台風ハイエンの現地調査成果報告とそこから得られた教訓に関するセッションを開催し、報告を行いました。

1. 小野裕一教授：Overview of Typhoon Haiyan and Reasons for magnification of damage due to Haiyan
2. 江川新一教授：Medical response to Typhoon Haiyan: Safe hospital and health centered risk reduction
3. 田村幸雄教授（東京工芸大学）：Wind-induced damage to school buildings in the Philippines due to Typhoon Haiyan in 2013 and lessons

2013年にフィリピンで発生した台風ハイエンについては、研究所として6度にわたる調査団を派遣し、多角的な方面から学際的調査を実施してきました。小野教授の報告は、これまで研究所で実施してきた調査によって明らかになった成果を報告し、将来的な減災政策に向けた論点を提示しました。

江川教授は、災害時の医療問題として、飲食や公衆衛生などの欠如によってもたらされる慢性疾患の問題性が紹介されました。また、多くの病院が台風による大きな被害を受けたことをうけ、安全な病院のあり方が再検討されるべき問題であることが指摘されました。

田村教授からは、学校の被害状況調査から、建造物の不十分な構造からなる破壊が紹介されました。また、骨組みや屋根の堅牢性と、強風に対応した設計の重要性があらためて確認されたことを報告しました。

セッション後半では全体討論をおこない、台風被害の調査成果を報告するとともに、被害の教訓を踏まえた今後の災害対策について、各国の災害研究者との議論を深めることができました。また、会議期間中は研究所のブースを設置し、活動内容を紹介するポスターの展示、HFA IRIDeS Review Report などの配布、東日本大震災の模様についての上映をおこない、来年3月の国連防災世界会議に向けて、各国に研究所の取り組みをアピールすることができました。



小野裕一教授



江川新一教授



展示ブースの様子



ブースで解説する江川教授と小野教授

文責：江川新一（災害医学研究部門）、小野裕一（情報管理・社会連携部門）

加藤準治（地域・都市再生研究部門）、天野真志（人間・社会対応研究部門）